

まだ終わっていない脳死移植問題

21世紀のライフスタイルを考える特別委員会委員長 榎原光恵

昨年、ついに脳死移植法案は通過した。私は初めから反対論者だったので、複雑な思いだったが、ドナー登録者の記載に不備が多いという報道を聞いてやはり国民は心底納得していないのだと得心した。登録者は記載方法が分からなかったのではなく、迷った末、わざと不備になるよう書かなかったのだ。未だに脳死移植を認めていないイスラエル人と日本人は、本質的に先見の明があり頭が良いのかもしれない。

フランスでは猿を実験台に、首から下を別の猿の四肢に移植する研究が既に行われている。成功は時間の問題だそうだ。またイギリスでも遺伝子を操作して、頭のない体や臓器を今に作り出すであろう。20数年前、試験官ベビーが誕生した時から始まった聖域への冒瀆。あのときから家族・父・母という概念は崩れだし、自分が何者かという歴史をもたない人々を生んだのである。そして臓器移植、“生”へのあくなき欲望は止まるところを知らない。

「脳死」という言葉はおかしい。「脳の重度障害」である。死んではいない人から臓器を抽出するための方便にすぎない。また先日の日赤における献血問題でも分かるように臓器はお金になるのである。無償で提供する「きれいごと」の世界ではない。現代医療は高額医療で金・金・金の世界である。

20世紀は科学の進歩で人類は破滅するところであった。21世紀は医学の進歩で人類は破滅に瀕すると予言したい。

日本が世界に誇る真珠の養殖、その大事なアコヤガイがここ何年か大量に原因不明で死滅している。もう何年かで真珠の養殖ができなくなると言うが、生殖ホルモンが原因ではないかと私は思う。

経済効率一辺倒で西洋文明に追いつき追い越してきた生き方を、いま考え直さないと21世紀に私たちの居場所はない。脳死を拒否する思いを世界に示すことができれば、私たちの特異性も世界に貢献できると思う。

情報公開制度（現況）調査報告

豊島区 戸口千和雄

“国家は永遠なり”、この前提で展開される官僚主義的無責任（倫理観の喪失、官僚前例主義、税金の乱脈不正支出等々・・・）。

信頼関係こそが社会生活、経済生活の基礎であるべきであります。来るべき日本の地方分権と日本の

民主主義のために、是非ともより成熟した情報公開制度の実現を願う一市民として、今回の情報公開委員会の調査活動を通じて、私の見た現状の情報公開制度に対する一つの視点を、皆様にご提案させて頂きたいと思います。

1. 情報公開制度評価法（一般図）5段階評価

情報公開度（要因）	各要因項目の総合評点
①制度環境	予算書、決算書、例規集その他関連資料の閲覧等の利便性、コピー代等々の経済的負担
②公開・開示資料の質と量	公開された資料の満足度
③担当課職員の協力度	情報公開担当課職員及び議会事務局担当職員の協力度、応対の安心感、満足度
④公開・開示資料のわかりやすさ及び事務処理速度	公開・開示された資料のわかりやすさ及び満足度及び開示請求書提出日から行政情報開示・公開までに要した日数

《ポイント》

1. 非常に悪い。
2. 悪い。
3. 普通。
4. 良い。
5. 非常によい。

2. 具体的適用

	情報公開度	①	②	③	④
豊島区	3	4	3	3	4
文京区	3	2	4	4	4
北 区	3	3	3	3	3

※以上、今回調査（東京23区、区長部局・食糧費）の一つの成果としてご報告させていただきます。

※以後も、情報公開が時代の流れから遊離した見せかけの制度にならないように、常に監視していきたいと思ひます。